

# 平成20年度基調報告

網走管内国際理解教育研究会  
研究部長 佐藤文昭

## 1. はじめに

原油価格の高騰による石油製品の値上がりや食料品の価格変動など、最近の経済面の身近な例だけを挙げてみても、ひとりひとりの生活が世界の動きとは無縁ではないことは明らかである。また、日本の食糧自給率や輸出入の現状を考えても、いまや世界とのつながりを断ち切ることができないことは周知の通りである。世界はまさに相互依存の時代に入っている。交通網、通信網の発達により、世界の距離は格段に縮まり、国と国、人と人がより豊かで協調的な関係を築くべき時代を迎えている。

しかし、現実の世界は多くの問題を抱えている。民族間の対立や宗教に端を発した紛争、世界の食糧をめぐる様々な問題、貧困や格差の問題、感染症や衛生の問題、教育やジェンダー・人権に関する問題、環境・エネルギー問題。そしてこれらは複雑に絡み合い、さらに困難な問題となっている。

例えば、環境に優しいと脱石油社会をめざして開発されたはずのバイオエタノールは、その原料を食用作物に求めてしまったことによって、食料価格の世界的な高騰を招いている。そこから貧困層がさらに「食」という生きるための基本的な権利すら十分に保証されなくなってしまった事実。生産国ではバイオエタノール原料を生産するために、森林を次々と伐採し大きな環境問題となっている。ひとつのことがらから問題が大きく広がっているのが現実である。

このような様々な問題を解決するには、世界の人々や国々の連帯が必要となる。世界の人々との連帯を進めていくためには、将来を担う子どもたちにこそ、人と人とが共に生き協力していくに足る力を備えさせていかなければならない。地球市民として、自分と地球の未来を重ね合わせていくことのできる子どもたちを育てていくことこそ我々の第一義と考え、そのための方策を追求していくこととする。

## 2. これまでの研究の流れ

日常の実践活動の中で、我々は特に意識していなくても国際理解教育的な内容に触れている。しかし、そのこと（国際理解教育の考え方）を意識しながら教育活動を進めることはたいへん重要である。国際理解教育に視点が向くことで育てたい子ども像がより明確になり、目標である「地球市民」の育成に近づくことになる。

本会では「いつでも、どこでも、だれでも行える国際理解教育」をスローガンに、全ての教員が、教科、道徳、特別活動など、

### 平成13年度

国際社会における人間性豊かな児童生徒の育成  
～身近なものから異文化を見つける国際理解教育～



全ての教育活動において国際理解教育を行うことを念頭に、長年活動を進めてきた。これは今後も引き続き重要な命題であるとする。

「総合的な学習の時間」が設けられ「国際理解」が例示されたことにより、網走管内でも多くの学校で国際理解への取り組みが見られるようになった。内容的には「コミュニケーション能力」の育成を重視した、小学校英語活動などである。その中でも ALT が児童・生徒にとっての異文化理解・交流の扉という大きな役割を担ってきた。学級担任が進める英語活動についても議論が始まり、この課題は大きく現在へとつながっている。

平成17年度の本会の調査によると、網走管内小学校では国際理解教育を行う学校が増えたもののその内容は英語活動にとどまった。また中学校では「国際理解教育は英語教育が担うもの」との認識が見られた。平成13年度の調査と比べ、活動の幅が狭まったのではないかとという危機感もあり、子どもたちが「身近な異文化」との関連性に気づき「世界とのつながりを求めて」いく過程を大事にして授業作りに取り組むこととした。その中からめざす子ども像である「よりよい未来のために、地球市民として、共に行動する子ども」の姿の実現をめざした。具体的には、「身近な素材を活用することによって世界と自分をつなげる活動」「国際理解教育としての英語活動」について研究を進めた。小中学校の各会員が、教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間と幅広く実践・交流し、昨年度の北海道国際理解教育研究大会北見大会へとつなげることができた。

#### 平成14年度

国際社会に生きる人間性豊かな児童生徒の育成  
～身近な異文化から自分を見つめなおす国際理解教育～

#### 平成15年度

身近な異文化から、自分を見つめ、広げる国際理解教育  
～総合的な学習の時間における英語活動のあり方～

#### 平成16年度

身近な異文化から、自分を見つめ、広げる国際理解教育  
～小学校英語活動と中学校英語学習の関連～

#### 平成17・18・19年度

自ら地球にひらき、未来を切り拓く児童生徒の育成  
～身近な異文化から世界とのつながりを求めて～

### めざす子ども像

よりよい未来のために、地球市民として、共に行動する子ども

- 身近な物事と世界とのつながりに気づき、そこに内在する問題を見だし、進んで追求していく子ども
- 異なる文化の人々とも進んでコミュニケーションを図ることのできる子ども

### 3. 国際理解教育の目標

世界平和に向けた  
共生の心の育成

自己の確立

国際理解教育がめざす目標

異文化理解

コミュニケーション  
能力・表現力

平成14年度より網走管内の国際理解教育の目標を以上の4つにまとめた。特にこの4つの目標をもとに全領域を通じた学習活動を進めていくことにした。

### 4. 研究主題について

平成20年度 研究主題

「自分と地球をつなぎ、未来を切り拓く児童・生徒の育成」

ー世界を感じる地球の子どもをめざしてー

#### ◎主題設定に当たって

北海道国際理解教育研究協議会の第8次研究では、子どもたちを理解から共感そして行動へとつなげていく道筋が求められてきた。網走管内では「身近な素材を活用することによって世界と自分をつなげる活動」「国際理解教育としての英語活動」について研究を進め、行動化につながる授業作りを実践し、昨年は全道各地からの研究大会参加者の皆さんにご意見を伺うことができた。

第9次研究では、児童・生徒がよりグローバルな意識を持った自己を確立するとともに、自分の未来をどう生きていくかを切り拓く、その過程を研究することとなった。

今年度は8次研究の成果を基に「仲間と共に行動する」「人や事象とのつながり」をキーワードにしながら、「自分」「教室」「地域」「地球」をどう結びつけ行動に表していくかを研究し、初年度として課題を明らかにしていくこととなった。網走管内でも研究主題を道協議会の第9次研究主題と重ね、網走管内の実態をもとに、サブテーマを「世界を感じる地球の子どもをめざして」とした。

## ◎副題について

### ① 世界を感じる

「違いを楽しみ、同じに驚く」子どもたちが異文化に触れる機会を持ち、それらを受容し、「異なるからこそ多様で豊かになり素晴らしい」と実感することは大切なことである。そのためには、それらの文化に対してそれぞれがしっかりとつながりを感じる必要がある。そういった意味で身近な素材を取り上げ、子どもたちの生活とさまざまな文化や人々とを結びつけていくことは、大事なことである。それらの経験を重ねることで、普段の何気ないことから、自分の生活が世界の様々なことと深く結びついていることに気づく。さらにそこから課題を発見し探求しようという気持ちが育っていく。こうして個々が主体的に世界をとらえ始める。

### ② 地球の子どもをめざして

自分と世界とのつながりに気づき、探求を始めた子どもたちは、積極的に関わりを求めようとする。ある者は話し・聞き、またある者は書き・読み、図や絵、ジェスチャーなど、様々な表現で関わろうとする。そういった活動を通して子どもたちは、自分自身の得意なことや良さにも気づいていくであろう。また、関わりを持つことを通して、連帯や共生の喜びを感じていくであろう。さらに、それぞれの課題を探求する中で、具体的に自分は何ができるのかということをも自分なりに考え、解決に向け何らかの行動をとろうとするだろう。

他者や世界の様々なこととの関係をつなげ広げていくことを思い、地球市民としての意識を持って、できることから行動していこうとする、そんな子どもたちを育てていきたい。

## 5. 研究の仮説について

**仮説1** 身近な物事に目を向け、地球的視点で見つめ調べることによって、自分と世界とのつながりを感じ、様々な問題を自分との関わりとしてとらえることができるだろう。

「わかる」だけでは人の行動には結びつかない。驚き、共感し、自らの課題となったとき、初めて何かをしようという思考が始まる。自分と世界の人々とのつながりを

感じられるような教材作りが求められている。子どもたち各々が学びの中で感じたことが、やがて行動に向かっていくことになると思う。

**仮説 2** 言葉の学び（外国語活動）を通し、互いを尊重する態度を育てることで、進んでコミュニケーションを図ろうとする子どもが育つだろう。

言葉を「人の心と心を結ぶもの」として捉えたとき、外国語活動は、相手に対してどう接していけばよいかを実践的に学ぶ場でもある。受容的な態度や行動の仕方などを具体的に学ぶことで、自信が生まれ進んでコミュニケーションを図ろうようになる。さらに、活動の中に世界につながるトピックを入れるなど工夫をすることにより、活動の意欲を高めることができると思う。

## 6. 研究の視点

**視点 1**

- ・身近な素材をもとにした、子どもと世界とのつながりが実感できる教材の工夫。
- ・行動化を促す授業作り。

その中で異文化への尊敬の念を持ち、さらに自らの生活や生き方への振り返りと見直しをなされ、どの文化も尊重していこうとする態度を養う授業作りをめざす。

共に生きようとする態度、さらには進んで互いの（共通の）問題を解決していこうとする態度を養う授業作りをめざす。

**視点 2**

- ・コミュニケーション能力の基礎を育む指導法の工夫。
- ・外国語活動を通した、世界とつながる意欲を高める教材の開発。

道協議会で提案している英語活動の基本に沿って、また新学習指導要領に基づいた新しい情報の収集に努めながら、ALTの有効活用、担任主導の小学校英語活動のあり方を模索し実践する。さらには、小学校英語活動と中学校英語科との連携の可能性をさぐる。

## ◎研究内容・方法

- ・教科、特活、道徳、総合的な学習の時間などを利用した  
国際理解教育の学習活動
- ・地域素材や身近な素材の活用
- ・地域の団体や地域の人々の活用（JICA や留学生などとの連携）
- ・国際理解教育とつながる英語活動
- ・小学校と中学校が連携した英語活動

## ◎「異文化」について

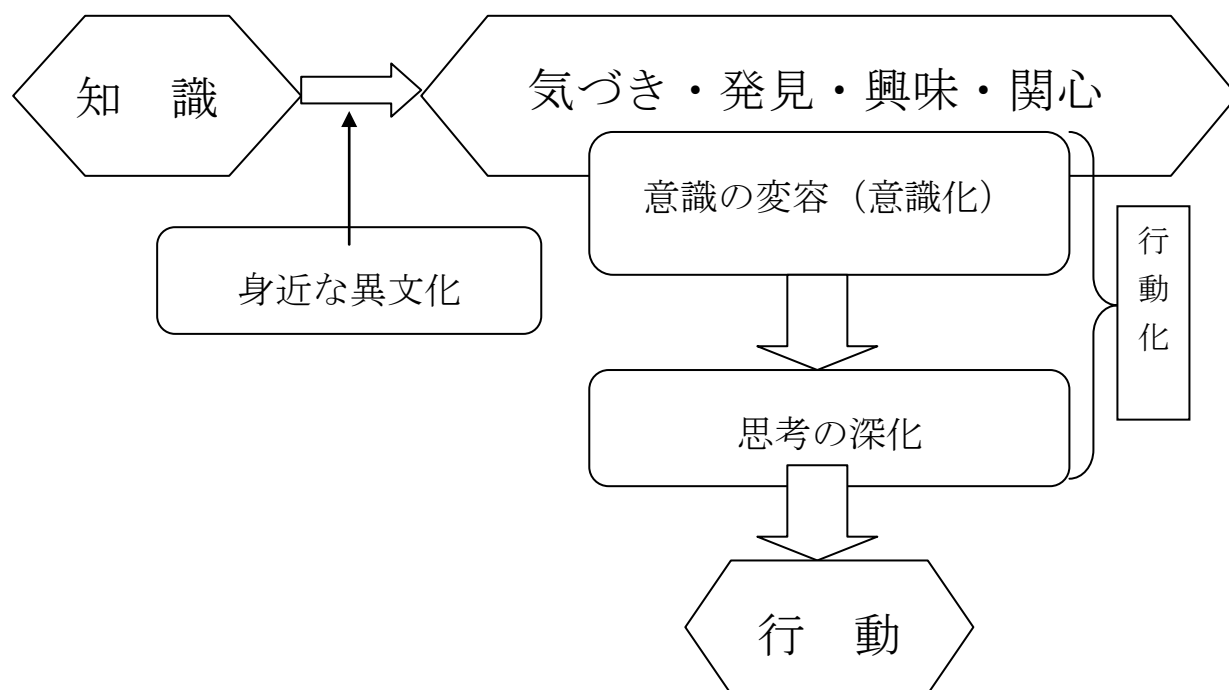
「異文化」というものの押さえについて、昨年度の北見大会でもいくつかの分科会で話題になった。国と国との関係のみでもものを見る考えや、1国1文化の発想で単に外国の文化のみを「異文化」という方もいたが、何が私たちにとって異文化で、何が自文化なのか。「わたしたち」というよりも、それはひとりひとり違うことであり、定義すること自体難しい。

「異文化」が何を示すかは、その立場によっても違って来る。ひとつの国に複数の民族や言語が存在する事もあれば、その民族や言語を使用する人々が複数の国にまたがることもある。少なくともそういったことを踏まえた上で、どの立場からの「異文化」なのかを考えて、この言葉を使用したい。

網走管内国際理解教育目標における「異文化理解」であるが、この言葉には、「異文化とはこの文化である」というような狭い意味合いはない。それぞれにとって自分とは違うもの、考え、行動などに興味を持ち、認め、理解するということである。文言については、今後も十分検討をしていきたい。

## 7. 行動化について

子ども自身の内面において「何かをしたい」という意識に向かう過程に目を向けた。まず、子どもの中に驚きや疑問、共感を呼び起こす。その際、子どもの生活に根ざした身近な物事を通して、世界の国々といかに深くつながっているかという認識を持たせる事を鍵とした。この工夫により、実感が持ちにくい世界も、リアリティーを持ったものを感じられる。

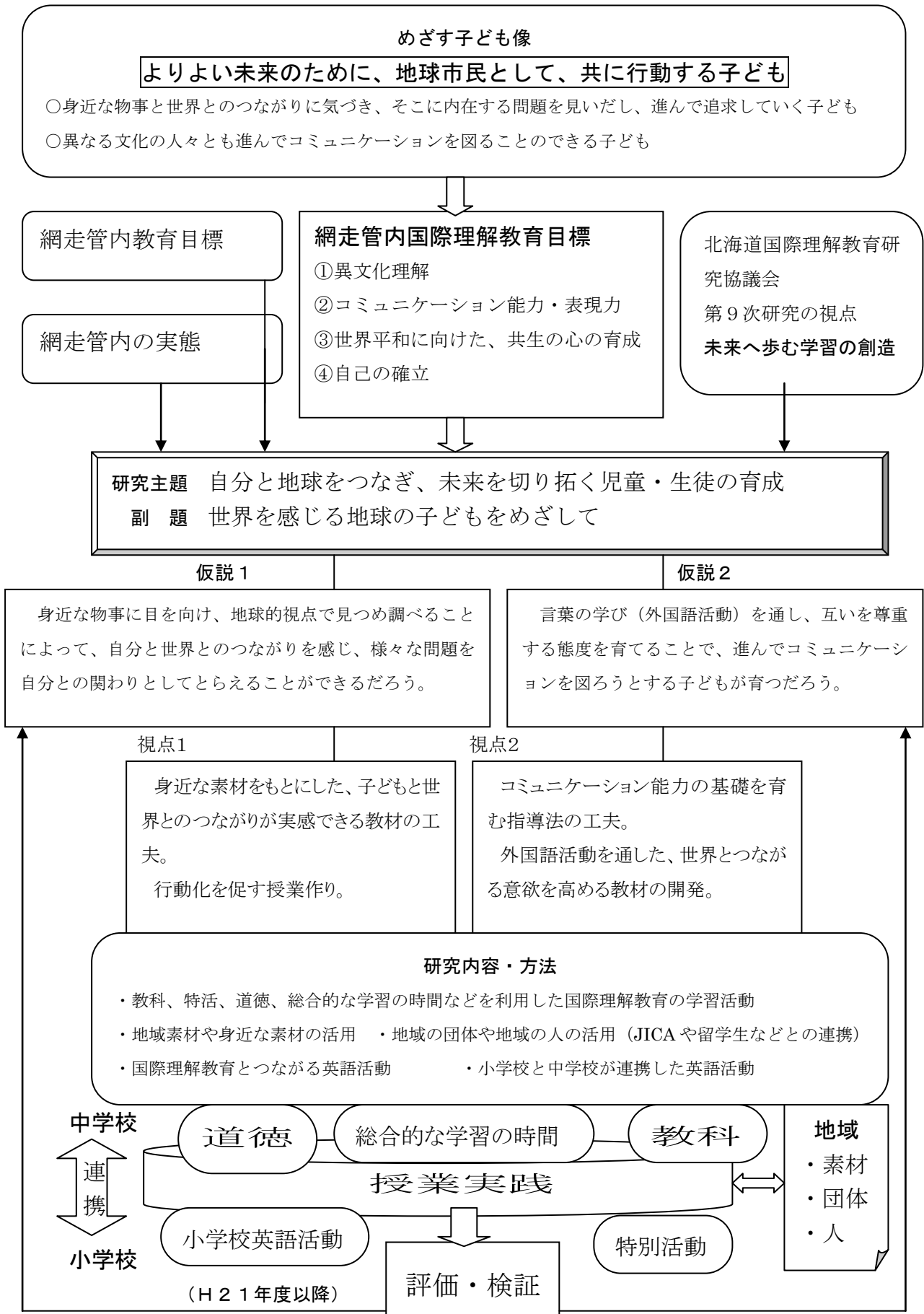


行動に至るまでには、十分な思考をする時間とそれを促す内容が必要と考えた。その思考過程においての行動をも含めたいいくつかの行動の型について、道の協議会から資料提案があった。これも参考にしながら「行動化」について話し合いを進めていきたい。

### 行動の型（案）

- もっとーを知りたい。情報を得るために……。 (情報収集という行動)
- こんなときにこんなことができるように……。 (技能習得という行動)
- こんなことを伝えたい。そのために……。 (提案という行動)
- こんな活動があるんだって。わたしも……。 (参加という行動)

## 8. 網走管内国際理解教育の研究構造図





## 9, 公開授業との関連

美幌町立美幌小学校 相馬 一之 教諭

単元名 「つながろう世界の人たちと」

視点1・地域の国際交流活動の教材化

- ・身近な素材を通して、世界を見つめる授業作り

視点2・ALTや友だちと関わり合う英語活動

- 英語圏の方かどうにかかわらず進んでコミュニケーション
- ・実際の交流を通じた、学習者の意欲を高める活動

この単元は毎年おこなっている地域の国際交流活動を教材化したものである。交流を通して相手と自分との共通点や相違点について知り、また思いや考えを伝え合う喜びを感じ、積極的に交流しようとする心を育てたいとの思いで授業を組み立ててきた。

英語活動ではALTや友だちと関わり合う場面を多く設定し、「伝えよう」「理解しよう」という意識は高いと聞く。調べる学習を通して予備知識はあるものの、そういった気持ちが英語とは限らない言語圏の人たちとの関わりに、行動として表れるのか。児童と初対面のゲストとのコミュニケーションのあり方が、この授業の最大のポイントである。

## 10, 指導案について

昨年度の全道大会の形式を踏襲した。次ページからその型を示し、図の中に大まかな説明を入れてみた。

- ①指導案のはじめに、「めざす基本目標」を記し、網走管内の国際理解教育目標のうちの何をねらって実践するのかを明らかにした。
- ②平成18年度胆振大会で使われた「トピック」をそのまま採用し、各授業がどのような内容であるのかを、ひと目でわかるようにした。
- ③「単元設定について」の中にある「期待する子どもの意識行動」には、単元の指導を通して、どう子どもを育てたいのかを記している。特にこの単元での行動化について、どう捉えているのかを記した。

\*国際理解教育に興味をもたれた方で指導案を作成した際は、ぜひ研究部まで連絡を。